OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	恐怖の君臨 ： 疫病・テロ・畸形のアメリカ映画
Author(s)	西山, 智則
Citation	大阪大学, 2015, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/53882
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　　名	（西山智則）
論文題名	恐怖の君臨――疫病・テロ・畸形のアメリカ映画

論文内容の要旨

世界貿易センタービルが倒壊するといった映像的な同時多発テロによって幕を開けた21世紀は、「テロの世紀」であり、それは「恐怖の世紀」でもある。19世紀が小説の時代であったならば、20世紀は映画の時代であった。『恐怖の君臨』は、小説から映画へとメディアがシフトするさなか、恐怖の表象がいかに形を変えて、継承されてきたのかを例証するものである。「恐怖」という大きな枠組みのもと、「疫病・テロ・畸形」をテーマとして、同時多発テロの2001年からビンラディンが射殺された2011年までの「ゼロ年代」の視点を通じて、過去や現代の映画や小説など様々なテクストにおいて、従来の社会を維持しようとする保守的な力と、それを覆そうとする他者たちの転覆的な力がぶつかるという文化的無意識をとらえることを目的とする。高級文化や大衆文化などの区分なく、時代を縦断して、多様なテクストを新たな文化研究の視点で再考した。

序章　恐怖の21世紀――ポー・映像の詩学・テロリズム

ＴＶの中で限りなく反復された同時多発テロの映像は、ヒッチコック監督の『鳥』を持ち出し、世界貿易センタービルに追突するジェット機が二羽の鳥に似ているとの指摘もあったが、ヒッチコックの映画には、エドガー・アラン・ポーの影響が根強い。同時多発テロとハーマン・メルヴィルの『白鯨』との関係はよく論じられるが、恐怖を追及し続けたポーと絡めてこの「恐怖(テロ)の時代」を振り返った。ポーの「大鴉」がnevermoreという言葉の変奏を反復したように、ポーの描いた恐怖は、映画のなかで形を変え、複製され続けている。映像が説得力をもって人々の間に合意を形成し、世界がアメリカ映画のようになりつつある現在、合意を捏造する映像の欺瞞を警告し、視ることの危うさを示すヒッチコックの『裏窓』のようなテクストこそが、21世紀に必要とされると結論した。

疫病

第１章　Ｓ/Ｍａｒｓ　Ａｔｔａｃｋｓ―疫病感染の政治学Ⅰ

疫病時に反復されるナラティヴ構造と隠喩としての病の問題を考える。ブラム・ストーカーの『ドラキュラ』は、マイノリティを疫病の感染源に捏造することで、それを排除するというナラティヴによって構成されていた。それはハリウッドＳＦ映画などの構造でもあり、映画史おいてはこれまで社会的少数派差別が繰りかえされてきたが、赤狩り時期に製作されたＳＦ映画から、ポーの「赤き死の仮面」、シェイクスピアの『テンペスト』へと「赤い病」のイメージを遡り、文学テクストがこうした言説に抵抗している様子を浮かびあがらせた。

第２章　エイズ感染の物語に感染しないために―疫病感染の政治学Ⅱ

エイズという問題を文化現象という点から考察する。エイズの短い歴史のなかで、感染源にゲイ・黒人・娼婦などマイノリティをあてはめるという少数派差別が行われてきた。そうした差別言説をフィクション、ノンフィクションを問わず多様なテクストから暴露し、そこには疫病の歴史において繰り返されてきた「発生物語(アウトブレイク・ナラティヴ)」という言説形態が存在し、エイズ恐怖とは、文化を構築してきた境界線の瓦解にたいする恐怖であったと結論した。

第３章　フィルムの帝国と物語の暴力―ゾンビ・感染・他者恐怖

ゾンビという恐怖の表象を感染と物語の暴力という視点から分析する。アメリカ映画は、「侵入される家・最後の弾丸・死よりも恐ろしい運命」などの映画史において反復されてきた原型的イメージを使い、アメリカという国家が先住民たちの土地への侵入者であったという記憶を改変し、他者が侵入してくるという恐怖を観客たちに感染させるという映像の暴力をふるってきた。しかしながら、ゾンビ映画のようなジャンルが他者恐怖を捏造するいっぽうで、人

種差別・消費経済・資本主義などを批判している転覆的側面も存在する。映画のなかのモンスターたちが、国家が侵略されるという自虐感を構築するだけではなく、国家に警鐘を鳴らしてきたことを提示した。

テロ

第４章エドガー・アラン・ポーのエイプたち―「モルグ街の殺人」・『キング・コング』・視線の帝国主義

同時多発テロというテロリズムを皮切りに、アメリカ文化において頻出する猿の表象を、エドガー・アラン・ポーの「モルグ街の殺人」から、三回リメイクされたアメリカ映画『キング・コング』などを中心に論じる。黒人に猿のイメージを重ね、その叛逆の脅威を小説や映画は煽り、そしてまた少数派に共感の視点をあたえてもきた。映画とは視るという行為であるが、アメリカ帝国の他者を「視る」という問題を、推理小説の探偵の観察方法、博覧会の展示などの問題と絡めて考察し、猿のイメージにアメリカの他民族にたいする不安が落ちている様子を示した。

第５章　殺人鬼（ころし）の帝国―ハリウッド的想像力の罪と罰

テロリストがハリウッド映画を「模倣」した同時多発テロを、ヒーローになりきろうとするアメリカ文化の英雄幻想と絡めて論じる。殺人鬼ものはアメリカ映画のひとつのジャンルを形成するが、映画を神話として国家形成を果してきたアメリカにおける物語学を考察する。ロバート・デ・ニーロ主演の『タクシー・ドライバー』の主人公に感情移入して、虚構と現実の区分がつかなくなったといわれる殺人犯たちは映画の模倣者だと批判されるが、映画的スペクタクルに彩られた同時多発テロこそ、映画を模倣することで国家のイメージを構築するという「罪」を犯してきたアメリカが、「罰」として、今度は逆に映画によって崩壊させられようとする危機であったと結論した。

第６章　トラウマの政治学―いかに体験をもの「語/騙る」のか

「トラウマ」という現象を「物語」という観点から考察する。トラウマという言葉が流行し、さまざまな小説や映画などでトラウマは殺人犯をつくりあげる契機として持ち出されているように、筋を推進してゆく全能的な装置としてトラウマが利用されている現在を概観する。トラウマの文化史をたどり、本来は語ることのできないはずのトラウマの意味合いを考えると共に、同時多発テロという国家的トラウマを受けたアメリカで、それ以後の映画の変容を追いかけた。トラウマのさまざまな表象を分析したうえで、物語を扱う文学批評の重要性を主張した。

畸形

第７章　Mのゆくえ――マイケル・ジャクソンと身体のユートピア

マイケル･ジャクソンというアメリカ最大のスーパースターについて､その身体イメージを人種言説などから論じてゆく。マイケル・ジャクソンがエレファント・マンと呼ばれた重度の障害者に共感を見せた理由を、フリークショーという19世紀の視覚文化から考察し、黒から白へと肌の色が変貌していったマイケル・ジャクソンの身体は、ハーマン・メルヴィルの『白鯨』などにも登場するアルビノであり、白人と黒人の人種区分のゆらぎとして、歴史を縦断してアメリカ文化全体に見られる恐怖の表象であったことを読み解いた。

第８章　奴隷とご主人様の詩学――サド・マゾ的想像力のゆくえ

現代日本でしばしば使われる「サド」「マゾ」などの言葉を、格差社会の反映またはそのパロディとしてとらえ、日本と西洋の文化的相違を分析してゆく。マゾヒスティックなキリスト教文化のもとに形成され、奴隷制度があり鞭の文化である西洋、しめ縄に代表されるように縄を神聖視する日本、その文化比較を行っている。21世紀の文学において数多く描かれる「痛み」のイメージを、自己を覚醒させる試みとして考えた。

第９章　異星人（エイリアン）/異性人たちの戦場――SF・身体・フェミニズム

想定外とされた福島の原発事故は、想像もつかない未来を想定するSF的想像力の欠落から起こったと仮定して、ＳＦ映画の重要性を確認するという意味からシガニー・ウィーバー主演の『エイリアン』シリーズを再考した。従来の女性イメージを覆すはずの『エイリアン』は、最終的に主人公の女性を白雪姫のような温和な女性のイメージに回収し、戦う女性たちが活躍する『エイリアンII』は、新たな西部劇として植民地主義に加担し強い男性というイメージを再強化し、形而上学的な広がりを持つ『エイリアンIII』は魔女狩りを反復することで、女性嫌悪イデオロギーを観客にすり込むなどの皮肉な保守的側面が露呈した。フェミニズム映画『エイリアン』シリーズが、最終的には能動的な女

というジェンダーの「畸形」を矯正することになった様子を検証し、それがイラク戦争のジェシカ・リンチによる捕囚体験記にまで行われていることを示した。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　　西山　智則　）		
論文審査担当者	（職）	氏　　名
	主 査　言語文化研究科教授	渡邉　克昭
	副 査　言語文化研究科教授	貴志　雅之
	副 査　言語文化研究科教授	畑田　美緒
	副 査　言語文化研究科准教授	木原　善彦
	副 査　言語文化研究科准教授	中村　未樹

論文審査の結果の要旨

本博士号請求論文、『恐怖の君臨―疫病・テロ・畸形のアメリカ映画』(森話社　二〇一三年)は、文字媒体から映像媒体へと表象メディアのパラダイムシフトが起こりつつある現在、アメリカ文学のテクストによって描出されてきた恐怖の表象が、どのようにかたちを変えて映画のテクストに転移し、かつまたそれが前者へとフィードバックしていったかを、豊富な事例を挙げて例証することにより、アメリカ文化の基底を流れる文化的無意識を鮮やかに描出しようとした大著である。「疫病・テロ・畸形」という三つの大きなテーマを設定し、アメリカに君臨してきた「恐怖」の実相を炙り出そうとする本論文の射程は広く、ポーを始めとする十九世紀小説から説き起こし、二十一世紀に至る多様なジャンルの映画やハリウッド的想像力を実証的に検証した本研究は、アメリカ文学・文化研究のみならず、日米映画研究の分野においても大いなる貢献が認められる。かつてない規模でテロが横行する二十一世紀を人類はいかに生きるべきかという問題意識のもとに、「恐怖」の言説を多角的に分析し、メディア・リテラシーの視点も絡めつつ著された本書は、著者の長年の多岐にわたる表象研究の蓄積と学問的研鑽なしには成立しないことが窺える。本論文の独自性は、文学テクストと映画テクストの間テクスト性を精緻に描出し、「恐怖」の言説がいかなる背景からどのように生起し、またそれがさらなる言説にいかに接合されていくかを、豊富な実例を挙げて学際的にたどっているところにある。

三部構成のこの著書は、序章を含め十章から編成されている。序章においては、メディアによって反復された9.11の映像を手掛かりに、アメリカン・ゴシックとしての同時多発テロという視座から、これまでメルヴィルの『白鯨』との関係で論じられることの多かった9.11表象をポーに引きつけて読み解き、新たな解釈の参照枠を提示している。そのうえで、他者表象の観点から映画における猿たちとテロリズムの連関を論じたのち、ヒッチコック監督の『鳥』『裏窓』、ひいては動物パニック映画の系譜を俎上に載せ、ポー文学の影響を指摘している。この章では、恐怖を生み出す様々な出来事の原因となる起源の捏造という、本書を貫く視座が明示されるとともに、映像によって記憶を改変するハリウッド映画の「記憶の詐術」のテーマが提起されている。

第一部で扱われる「疫病」においては、まず第一章で、ポーの短編「赤死病の仮面」から説き起こし、『バイオ・ハザード』、『ホット・ゾーン』、『アウトブレイク』、『ドラキュラ』などの映画や小説を分析することにより、疫病感染の政治学を鮮やかに描出している。この章では病の侵入の図式が、ＳＦ映画を経由して、エイズやエボラ出血熱を扱うノンフィクションにいかに受け継がれているかを考察することにより、東方の他者に対する西洋の不安が疫病のイメージに色濃く投影されていることが明らかとなる。その過程において、文学テクストがいかに病の言説に迎合し、 また抵抗するのかといった重要な論点が導入されている。第二章「エイズ感染の物語に感染しないために」では、文化現象としてのエイズが病の記号論として分析され、『そしてエイズは蔓延した』をはじめとする多様なエイズ表象に関する考察を通じて、感染経路の究明こそが「発生物語」としてテクストの中核をなし、新たな病が出現しようとも、過去の病の語られ方が反復されるという洞察が、説得力をもって提示されている。第三章「フィルムの帝国と物語の暴力」では、悪魔祓いするアメリカという視座からゾンビ表象に焦点を絞り、アメリカ映画が再三フラッシュバックする先住民虐殺の記憶を、スペクタクル映像によって幻惑させ、忘却させようとしてきたことを豊富な実例を挙げ、明らかにしている。不快な記憶を遮断するために捏造される記憶をフロイトが「隠蔽記憶（スクリーン・メモリー）」と呼んだことに因み、アメリカの記憶は、まさにそのような意味において「映像記憶（スクリーン・メモリー）」と称されるべきであるという見解は、注目

に値する。さらにこのジャンルが、そのような他者恐怖を捏造するのみならず、人種差別、消費経済、資本主義など転覆させる側面を併せもつという指摘は首肯できる。

第二部「テロ」においては、第四章「エドガー・アラン・ポーのエイプたち」が、アメリカ文化において頻出する猿の表象に着目し、リメイクされてきた『キング・コング』、『猿の惑星』といった映画の特質を、ポー文学との関係において浮き彫りにしている。ポーの「モルグ街の殺人」の緻密な読みに基づき、ジェンダー、人種を絡めつつ、他者を「視る」という問題系を推理小説の探偵の観察術、博覧会の展示方法などと絡めて考察し、猿のイメージにアメリカ帝国の他民族に対する不安を探り当てている。第五章「殺人鬼(ころし)の帝国–ハリウッド的想像力の罪と罰」は、アメリカ映画において一つのジャンルをなす殺人鬼ものに焦点を絞り、『サイコ』、『タクシー・ドライバー』、『十三日の金曜日』をはじめとするこのジャンルを、アメリカ文化に見られる英雄幻想と絡めて考察している。この議論を踏まえ、同時多発テロという文脈における「史上最大の殺人鬼」としてのビンラディンとブッシュに関する表象分析がなされ、「フィルム・ネーション」としてのアメリカが、ハリウッド映画を模倣するテロリストのテロによって罰せられるという構図が鮮やかに炙り出されている。第六章「トラウマの政治学–いかに体験をもの「語／騙る」のか」では、同時多発テロという国家的トラウマを受けたアメリカ映画がいかなる変容を被ったかが、『羊たちの沈黙』、『サイコ』といった9.11以前の映画と、『ものすごくうるさくて、ありえないほど近い』、『ワールド・トレード・センター』をはじめとするポスト9.11映画との比較対照を通じて明晰に論証されていく。

第三部「畸形」においては、第七章「Mのゆくえ―マイケル・ジャクソンと身体のユートピア」が、十九世紀のフリークショーやエレファント・マンを踏まえ、マイケル・ジャクソンの身体表象の変容が孕む多様な問題系を、ポーやメルヴィルのテクストを援用しつつ、白人と黒人の人種区分の揺らぎとして捉えることに成功している。第八章「奴隷とご主人様の詩学―サド・マゾ的想像力のゆくえ」では、マゾヒスティックなキリスト教文化の影響を受け、奴隷制度による鞭の文化としての西洋と、縛りの文化としての日本を比較したうえで、傷を描くゼロ世代の文学と映画テクストについて、苦痛の政治学の観点から緻密な分析を加えている。SF的想像力の今日的意義という視点から『エイリアン』シリーズを論じる第九章「異星人(エイリアン)/異性人たちの戦場―SF・身体・フェミニズム」では、フェミニズム映画『エイリアン』シリーズ三作が、「畸形」としてのジェンダーのステレオタイプの転覆をいかに矯正してきたかをその軌跡を丹念にたどり、それがイラク戦争のジェシカ・リンチによる捕囚体験記とどのように接合されるかを考察している。

以上のように本論文は、「恐怖の君臨」という視座から、夥しい数のアメリカ映画の映像テクストを緻密に読み解き、それらをアメリカ文学のテクストと有機的に関連づけることにより、アメリカ的想像力や集団的無意識という文脈においてダイナミックに定位しようとする極めて野心的な論考である。ややもすると個別のシネマ批評に終わりがちな映画批評を、文学テクストとの関係において系統だった視点から包括的に捉え直し、アメリカ文学・文化研究の新たな準拠枠を提示した本書の意義と功績はまことに大きい。このような基本認識を共有しつつ、論文審査担当者からは以下のような質疑がなされた。「恐怖の君臨」の恐怖は、英語で表現すればhorrorなのか、terrorなのか。両者を区別すれば、さらに緻密な議論が展開できたのではないか。日本映画への言及も少なくなく、アメリカ映画に必ずしも議論が特化されていないのはなぜか。人名の誤植や、若干強引なルビ振りが散見される。アメリカはどのような意味で神話を欠いているのか。恐怖との関係において「キッチュ」という視点があれば、議論にさらに捻りが加わったのではないか、といった質問である。

しかしながら、以上の指摘は、本論文の学術的価値を本質的に損なうものではなく、四百頁を超える本論文は、ジャンル横断的な射程の大きさ、網羅的かつ緻密なテクスト分析、実証性に富む議論の展開、洞察力に満ちた結論により、アメリカ文学・文化研究への貢献は顕著である。

上記を十分に精査し、総合的に判定した結果、審査委員は全員一致で本論文が博士（言語文化学）の学位を授与するのにふさわしい論文であるとの結論に達した。